WASON
HQ
1104
J94+

Aug. 1891
no. 279

女學雜誌

第二百七十九號
明治二十四年八月廿二日發兌

人情觀察の方　社説
國民之友（夏期附錄）批評
普門品を讀む　天知

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 279 AUGUST, 22TH. 1891.

EDITORIAL:—Divinity and Humanity; A wild flower; Independence and Individuality.

CRITICAL NOTES:—Supplement of "The Nation's friend."

CHILDREN'S COLUMN:—"Little Lord Fauntlery." (A Translation.).

MISCELLANEOUS:—Home from the Hakone Mountains, (Kwaho.) Ice-water. (Yoshida Nobu.)

THOUGHTS AND FANCIES:—Thinking of One's Friends. On Reading Fumonbon."

NOVEL:—"Nagare no Ashi." "The Serpent in the Heart."

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

第二百七十九號目次

●社説　山中獨語(人情觀察○野の花○獨立)
●批評　國民之友夏期附錄の評(撫象子)
●兒籃　小公子(若松しづ子)
●雜錄　箱根の山づと(花圃女史)○氷水(吉田仲子)
●隨感　離別(天知子)○普門品を讀む
●小説　流の葦(四)○襲(是空子)○腹中の蛇(湘川漁夫)
●寄書　男尊女卑習慣の近因(中)○故武光道子の傳○
●時事
●女報

女學雜誌社出版書目

鈴木弘恭大人述	つれ〲草講義	一冊	價金八錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	一冊	同十六錢
鈴木弘恭大人述	百人一首講義	一冊	同三十五錢
船越鼎太郎君著	産婦小兒攝生法	一冊	同十六錢
關輪正路君纂	ひめ鑑	一冊	同四十五錢
中島俊子著	善惡之岐	一冊	同卅五錢
横山雅男君著	婚姻論	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演説	廢娼演説	一冊	同五錢
巖本善治述	妓樓全廢	一冊	同五錢
島田三郎、巖本善治同著	公娼可滅	一冊	同五錢
農學士寺尾熊三著	植物學	一冊	同十二錢
林學生星野愼著	昆虫植物金石採集法	一冊	同十錢
明治女學校教師八木兼辰著	和畫手本	四冊	同一圓
女學雜誌社編輯	演説著作材料	八冊	同四十錢
巖本善治著	鐙子小傳	一冊	同八錢

下六番町六番地
女學雜誌社

女學雜誌 第二百七十九號
明治二十四年八月廿二日發兌

社說

山中獨語（中）

○人世觀察の聖法

人世を觀ずるには一種の水晶を見るが如くすべし、或る一角より之を洞察せずば、燦たる其光彩を認たむるを能はず、とは文哲エメルソンが、句なり。

「人」と云へる靈妙絶倫の一大書籍を繙とき、之を讀むと彌よ久しく、之を考ふると彌よ深きに隨がつて、彼のエメルソンが秀抜ある一句を味ひ識ると、更に彌よ濃やかなり。

人は各自二個の人より成り、一心自づから二の法あるを覺ゆ。蓋し內外に存して、靈肉の二つに宿するものか。其一は邪を惡み、義を慕ひ、嚴そかなる律法を天より得て、高潔に攀ぢ登らんとし、賤汚に脫出せんとする、至强至大なる良心の感覺を懷き、又の一は、此の聖なる希望を汚がし、心を引下げて、肉慾の假初めなる榮華に飽かんとを欲し、良心を虜にして、肢躰の罪に屈服せしめんとする動物の慾に滿つ。左れば、一個の人の爲す所ろ、自づから此の二樣の現象を露呈せずんばあらず。奸惡の徒といへども、稀に慈善の心を發せざるにあらず、聖人といへども、時あつてか、矩に超ゆるの邪念なきにしもあらず。

故に、人事の合して、社會の情態となる時、もしくは人理綜合せられて、一科の學理となる時、亦自づから二樣の現象なくんばあらず。

左れど、人は其何れに安んじ、亦其何れをか望むと云はゞ、何人といへども、內なる人に從わんとを欲して、外なる人を斥けんとを祈らざるはなし。わが願ふ所ろの善は之を行はず、反りて願はざる所ろの惡は之を行へり。然れども、惡は其願はざる所ろ、善は其願ふ所ろなり。願と云へる者の、人の理想たり、人の刺擊たり、人の安着塲たるとを知ば、人は遂に此願に達せずんば止まず、休せず、安ぜざるを知らん。その此處に達らざる間は、其假りの旅行に過ぎず、其の斯の如く行ふとを得ざる仕事は、其心に樂しまざる所ろのものなり。左れば、人と世とは終に其願ふ所ろに達せん。人世の運命傾向に達觀

するものは、此確たる事實を認めずんばある可らず、況してや人を導びき其理想に達せしめんとを欲するの徒は（改革者、敎師、哲學者、詩人、皆な此徒なり、之を大觀せば、人は皆な此徒ならずんば不可なり）、人の此の理想とする所ろに付きて、解釋し、啓發し、獎勵する所ろなくんばある可らず。

世に二種の學者あり、一は、人を生れながら至聖至善なるものとし、罪惡を心外の附加物として、只管ら、社會包圍の敎育を罪の元となす。此類の徒は、人に生れながら罪慾あるとを忘るゝを短所となす、左れど、人をして其自己を重んぜしめ、其前途に多望ならしめ、以て、能く其善を獎勵するに至りては、之を長とせざる可らず。

他一種の學者は、人を生れ乍ら下等なるものとし、其罪惡を由來の遺物とし、利己の念を以て、聖善の發車塲となし、之より變遷進化して、遂に高潔の德に到達すべしと云ふ。此類の徒は、人の邪慾惡念を解剖して、禽獸にも倘ほ其親しみあるとを思はせ、頗ぶる人の由來を確認せしむるの一得ありと云へども、人をして義に奮ひ善に勇ましむるとを得ず、自づから人を下に安んぜしむるの短所あり。

暴りに偏し、わざと一方を忘却して、辛くも其希望に達せんとするは、頗ぶる怯なるとす。二種の論者各自此の弊なきにあらず。然れども、人を啓發して、之を善に勇進せしめんとを欲するに當り、人の行爲を悉皆禽獸進化的に解釋し去らんとするは、事理を知らざるの輩あり。

もし、優勝劣敗の理を以て解釋せんとせば、人間万事多少此解釋の適せざる所ろあらざるべし、何んとなれば、何如なる聖人の德行にも亦多少此の慾元を存せざる所ろなければ也。もし需用供給の理を以て解釋せんとせば、亦之に均しからんとす、何んとなれば、何如なる高德の清行にも、亦多少此の動機を存せざるとなければ也。但だ常に忘る可らざる所ろのものは之のみ、人の行爲の意思本念は、惣てたゞ此の勝敗需給の思ひのみにてありしか、否やと。

例せば、彼の蠻人が老たる親を山に棄るの習慣を以て之を言はん、或人は之によりて、人に親を敬愛するの天性なしと論じ、孝は、習慣中に發成したる敎育上の德化なりと言ふなり。左れど、安んぞ知らん、此の陋習は反て老親を愛するが爲めに

出で、われもし之を棄てずんば、人之を殺さん、敵之を殺さんとの憂慮より發したるものにあらざるとを。

或る蠻民が子を殺すも亦之に同じ。人は之によりて、親、子を愛するの天性なしと言へり、然れども、之を殺すものは言へり、浮世は憂艱の場にして其苦耐へがたし、わが子をして此中に成長せしむるに忍びずと、則はち之を碌々呱々の裏に殺す、亦是れ親の愛にあらずや。

余は徒らに偏するとを好まず、理化生物の學理は用ひて大ひに人性を解釋するに益なしと言ふと能はず、然れども、人は最初其禽獸と何如に接近せしに係はらず、今は則はち万物に靈長たる一の人間たる也。此人を解釋するに當りては、則はち人を見るの眼識を用ひずんばある可らず。

久しひ哉、人事諸科學の德より離るゝと、冷淡無情の先輩連に、物理を以て人の學を解し、禽獸の慾を以て、人の事を釋かんとす。曰く、人は、自己の快樂幸福の爲めに万事を爲すものありと。曰く、經濟學とは、最少の損を以て、最大の益を取るの策を教ゆるものありと。曰く、法律學とは、自己の權を毫末も曲げざるの方を考ふるもの也と。曰く、政治學とは、與ふる所ろに均して其保護を受くるの道を窮むるもの也と。斯して、人の万事を利己の動機に反らしめ、犧牲献身の文字を、活務者、學者間の、一冷笑物となす。

眞とに「人」を知るもの、何を以て、斯の如きに満足するとを得ん。見よ、見よ、此の光景、何時迄かつゞかん。

○野の花

根を相結び、枝を交も〳〵接じへ、共に露を分ちて、樹の下影に列び生へる野の花、互ひに顧みてほゝえむらん。心なき人、卒然之を殺し、其屍骸を頭上胸間に插して同類に誇らんとす、情けなきと幾干ぞ。ボルンズ、ヲイヅヲルス等、いと細やかなる野の花を見て、至切の情に動き、之に對して限りなきの語を交へたるとあり。亦蕉翁ゆき〳〵て人なき山の奥に入り、寂然孤影なくして谷川の水の音遠く只とゞろく邊りに歩める折、路傍に笑ふ一野花を見て、心地たとへん方なく、感切りて、「山路來て何やらゆかしすみれ艸」と吟じぬ。共に情けある人の眞心なり。

或る旅行者の文に云く、心なきしれ物は、さま〴〵の色の花を集め、直ちに枯萎るべき花玉を造らんとて、錦の如き野を荒

して多の草花を殺す、彼は此花玉を示して人に誇らんとすれど、余は之を賞せざるのみならず太く之に泣く。花玉の花は花にあらず、花の死骸也、既に其美と其態と、其周邊の風景とを失ひ、殺されて哀れむべき亡骸を與へたる耳。彼軟らかき地の上に茂れる葉の間ひより揚々として頭らを擡げ、露を吸ふていと快ちよく榮へたればこそ其天眞の嬌態もありつれ、斯の如く死して美人の腕に抱かるゝと雖ど、既に自己に趣きなきのみならず、且美人をして極めて慘酷無情の人たらしむ」と。余山中の花を見て特に此感深し。

○獨立心

日本の人心に何の情尤とも多く欠乏するかと云はゞ、獨立心なきと、獨自一己の守念なきとなど、必らずや其中の一二なるべし、特に婦女子に至りて甚だし、從來婦女子の道には、獨立の心なきを可とし、別て獨自一己を存せざるを以て殊勝なりとせり。而して、君の馬前に死すべき臣下、たゞ命を蒙むりて學を修むる學者輩といへども、亦自から此趣きなきにあらざりき。カント曰く、汝が權利を踏付らるゝ勿れ、獨り立ち得る時人の助を受る勿れ、寄生虫、追從者、乞食たる勿れ、汝すでにうぢ虫たらば、踏殺さるゝとも恨むと能わず。

批評

國民之友夏期附錄　撫象子

吾亡妻

至誠至眞の情より發したる文は、讀出して一行、二行過ぎざる間に、すでに心の動くを覺ゆ。讀過一遍すれば、落段句節自づからにして調あり、松風の吹き絶えて月白く登り、月沒れて、水波なごりを留め、一陰、一陽、總べて穩やかにして眞となる美にあらざるはなし。

宮崎三昧氏が「吾亡妻」の文を讀み、近來久しく感ぜざりける此心地を味はひたり。文の氣の眞實篤好ある處ろ、何等秀靈の品ぞ。調節に巧みを求めずして而も自づから韻を發すると、平素修文の凡ならざるとを證す。

啓行、歎きて、などの文字再三あり、耳だちて憾り惜しく思へり。此丹誠、此熱血、眞人と姑氏との信且愛を買得たりの一句に至り、思はずも殘念と叫ばれける。

左れど、最初讀すぐし來り、「嗚呼予は死に至る迄己が妻を欺けり」の句に至り、更に讀ゆきて、「彼の照子の瘁盡せる身躰

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

が瓜牛茄馬に扶けられて來る姿の何故か隱然として腦裏に結晶せられ朦朧として眼中に映じ」と云ふ所ろに至り、心動いよ／＼高く、「子は母に後れて慧見とあり父は妻を喪いて愚人となれり」の結句に至り、卷を掩ふて暫らく眼を閉ぢぬ。結末、大理石像の四字出づるに及びて稍や心づきたれど、要するに、魯縞を穿たずとの歎なきにしもあらず。最後、「予再び室なかる可らず」の句に至り、悚然として畏れたり。

前年、叙事文範の世に出でたる時、余は太たく之に服し、當時の女學雜誌上に於て之を推薦したりき。左れど、かゝる事情の中に出で來にけるものはと思はず、顧みるに實に冷淡なる批評にてありける、慚愧に堪へず。

風流悟

雷音洞主とは、露伴子にはあらざるか。風流佛、風流魔にまさりて一段高等の觀念に溢れたるは、風流悟あり。文章の例に似ず迂曲冗長なるところ、或は兆民の筆に似て、但其靈感情を欠き、或は湖處子に似て、而も其柔弱素を脱したり。左れど、文の斯の如くなりしは、實に止を得ざりしとにて、之にても尙ほ言ひ了えがたく悉し盡しがたかりし情多かりしならん。禪味に、罵嘲の氣を加へて、快ちよき節、常の如く多くあれど、何となく愼しみ氣の現はれたるは、戀の賜なるべし。眞の戀ひせざる人は、眞の人情を談じがたし、而して眞の戀とは、言ふ迄もなく、成就を無理に必要するものにあらず、此邊無限の趣むき、今日洞主が優しき雷音によりてやゝ紙上に響き殘れり。

「嗚呼斯の如くにして我は恨を忘れたり、愉快を覺えたり、深き戀慕に入りしを心づきて樂しめり」「而して我は僻みたる性を稍々和らげられし、我は未曾有の歡喜を得たりし、而して我は我が周圍の事物に從前の如く鋭どくあたらざるやうありし」云々。此邊段々靈變の趣むき、嘗て親から經驗したるものにあらずば、味はいを盡すと難し。

要するに、情の微やかなるを以てにあらず、粗放豪狂の人の戀を寫し得たるを以て、此小説の妙所となす。故に、讀むもの亦た彼に要めずして此に探らずんばある可らず。

餘り西洋向の思想に慣れず、慣れざるのみならず、之を罵しり、戀にやつるゝなどは、弱虫のすることと嘲けり、男は腹をかつさばき、義氣に生命をくれて遣るものとのみ信じたる類

の江戸子にして、若し或時眞の戀をせしとありとせば、其悟り必らずや、斯の如くなるべし。而して、其風流に悟を得たる曉き、古今未聞の新經驗を得たりなど感ずるは、多くある例しなり。一笑すべきとなれど、亦微笑して共に祝すべきの悟りなりと謂つべし。

洞主、預て廣告すらく、此文の味ひを知り得るものは、作者の外に唯二人あるのみならめと。左れど、之に同情を表し得るもの、更に多かるべきとを信じ、先づ作者が爲に祝ひ、次に、眞の戀の爲に謝す。

雜說

思軒居士が文、いよ〳〵圓練完具すと謂ふべき哉、淸雅にして一條の幽致を貫く所ろ、妙地に達す。「昧者」を論ずるに及び「一味は蓋し其心に一處死肉あるなり」の句、人を驚かす。而して居士が文の秀處大率ね此類の文字に存す。

空屋

余は初めて西村隱者の作を讀たり。佐太郎と云へる沈愼篤實にして、學を欠き、才を藏したる、一個のカラクターが、其弱點より誘惑せられて、遂に不測の災を惹き起す變遷を、幻の如くに畫き、細心なる良心一度び發揮して、四面の光景之を義責するの狀を寫し、傍はら、嚴にして心得ある里方の親と、若氣の寡婦一夕肉慾散じて煩惱朝の霧に先だちて散り失せたる由緣とを、薄らかに書現はし、大要、情の奧を穿ち、心の根を窮めんとしたる趣構、世の常の着眼にあらず。文未だ至妙ならずと云へど、用意慘澹、經營の跡見へざるうちに而も歷然たり。蓋し、今後此人の名作に接する彌よ多からんとを信ずべき理由あり。

曇天

「闇中政治家」と均しく、「父」に關して案を立たり。主人の格に立たる「佐野一郎」は、彼の大入道が學問したるものなり。僕は依然として探偵なり。旨とする所ろは、曇天日光を見ざるによりて、人の心、鬱結し、憤慨し、遂に意想外の「罪」を犯すの義を解し、人元來罪なし、社會人を縛して罪人とならしむと云ふにあるなり。文章は「闇中政治家」の比ならず、數等の上にあり。惜ひ哉、日本近來の政況、未だ以て、ルソウ、ユゴの輩らを激せしむるものあらず、加ふるに、草食單衣の人民中、絕えて深刻沈痛の氣象を普通せず、此を以て、抱一庵

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

が此篇に類す著作は、初めより戯作めきて、甚はだ實際に縁なき心地せらる。左れど、讀者を多少惱殺するは凡手にあらず。其實際あらぬ心地せしむるは、日本の幸福なるべし。然れども、資質慈善の心あつく、廣闊なる奥羽に住して、小作を緑兒の如く撫治する所ろの人、一と度び、肉食者輩が民の膏血に衣食して而も揚々たるの景を觀ば、上京一週、再三諫止、上書して聞かれざるの后ち、遂に上院を焼き盡し、上議員を鏖殺せんとするの心起らざるにもあらず。嗚呼、日本今の政況は果して然るか、然らざるか、幸ひか、不幸か。

兒籃

小公子。

若松しづ子

第八回（甲）

此次の日曜に、モドント氏の説教を聞ふとて、集ふた聽衆は平常よりも、余程、多數で、モドント氏は、禮拜堂に嘗て是程に群集したとの有つたのを、殆んど、記憶されなかつた位で、平常、教師の説教を聞に來たとの無い者まで、此日には席に臨んで居り升た。それのみか、モドント氏の受持でない、隣村からまで、人が見えた程でした。其群集中には、氣の好さそうな、日に焼けた百姓もあれば、頼母しそうな、ドッシりして、頬の色の好ひ、おかみさんも居つて、何れも、けふを晴れと、仕まい置の衣裳を着て居り升た。そうして、一家内に付て、平均、六人位は子供を連れて來てゐました。お醫者夫婦も來れば、仕立屋も來る、代診も來れば、藥種屋の丁稚も來る、少くとも一家族から一人はどうしても、見えた樣でした。前の一週の間といふものは、此領内にフォントルロイの評判のない處はない位で、殊に彼の城下の荒物屋のおかみさんの處へ、

針を一本か、さなだ紐を一尺位買に來ては、其の話しを聞たがるので、店の戸につけてある鈴は、往來の烈しさに、殆ど、振り切れる樣でした。此おかみさんは、若樣のお部屋はどふいふ飾り附がしてあるといふと、新しく買つた結構なおもちやの直段がいくら〳〵といふと、美事な、栗毛の小馬と、夫相應に形の少さい馬丁まで揃へて備へてあるといふ事、又其外に、銀製の馬具が着いた、少さな馬車も拵らへてあるといふとまで、一々委細に承知してゐて、若樣の御到着の當夜、下部どもが一目見た處で、若樣のとを、何と申したといふと、又お婢たちは、あの可愛い〻お子を、おつかさまの手から離すとは、餘り、むごたらしいとだと、一同氣の毒がつたといふと、又自分が本當に尤だと思ふといふと、そうして、其お子がお祖父樣が入つしやる書齋へ、タッタ、一人で遣られた時は、みんなが、冷〳〵した、なぜといへば、侯爵樣がどんな取扱ひ樣をなさるかしれぬ、平生から、子供はさて置いて、自分たちの樣な、隨分好い年をした者でさへも、こらへ切れぬほどひどい癇だから、といつて居たといふとを一々聞傳へたまゝ、人毎に話して聞かせ升た。荒物屋さんが二人來てゐた中、一人のおかみさんに向ひ、

一寸、ヂェンスのおかみさん、ダマスどんがそういひ升たよ、可愛そうに、あのお子は、何にも知ないで、御前を見て、ニコ〳〵して、生れ落た時から、心安くした人かなんぞの樣に、御前にツン〳〵お話をしたので、御前の方が却つて後れが來て、眉毛の下から、チット、見詰めたまんまで、たゞ、其話を聞てお出でしたと、

といつて、忙がしそうに、又一人に向ひ、

それから子、お聞なさいよ、ベーツのおかみさん、ダマスどんが、御前は心の底では、悦んで、自慢して入つした樣だつた、それも、尤だ、今時の子供の樣でこそないが、器量といひ、行儀といひ、あんな子、見たとがないからつていひ升たよ。

それから又、ヒッギンスの話も出たのでした、モドントさんが家へ歸つて、食事の時に、家族の者に話して居た處を、小遣が聞て居て、臺處で話すと、それから其噂が、野火ほど足速に四方へ廣がり升た。それから、市日になると、ヒッギンスが町へ出て來たので、四方、八方から、其事柄を尋ねる。それから、どふいふ始末で有つたと質問されるので、ニューウィックも、二三人の人たちに、フォントル、ロイ殿の名の記してあ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

る手紙を出して見せ升た。

そこで、百姓どもは、澁茶を呑により合時も、買物に出掛る時分に、話をする種が澤山出來て、思ふ存分餘す處なく、聞ては傳へ、聞ては傳へしたので、間もなく、其評判が領分一杯になり升た。さて待まふけた日曜になれば、此女たちはいち早く、教會へ歩いて行くか、さもなければ、夫に勸めて、小馬車を驅て貰ひ升た。又夫とても、追ては、大殿の跡を繼いで、地主にならうといふ若君がどの樣な人物かと、見度と思ふ心がなくも有ませんかつた。侯爵は平常、教會へ出席なさるるなどは、極く稀でしたが、併し此時は殊更、フォントルロイを伴つて、ドリンコート家の定まつた席へお臨みになり升た。此朝に限つて、人々は會堂へ直ぐ這入らず、會堂の裏や、通道にも、物待顔にブラ〳〵して居る者が大勢有升た、門にも、入口にも、あちらにも、こちらにも、一塊りづゝ、人が集つて居升て、大殿が御出席にならうか、なるまいかと頻りに評議して居升た。其評議が最も熾んになつた時分、何か俄かに聲をたてゝ、かう云つた女が有升た、

アレ〳〵、あれはキットおつかさまだろうよ、マア若くつて、器量の好いと！

こふ聞た者は、誰も彼も一時に、振向いて、こちらへ歩いて來る、黒づくめの服裝をした、柔和な姿に眼をつけ升た。喪服についた顔蔽は、ズット後へ跳て有て、眼鼻だちの美やかで、尋常な處も、小供のほど柔かで、艶かな髪が、黒い質素な帽子の下から見えて居升た。

エロル夫人は邊に集つて居る人々には氣も付ず、頻にセドリックのと、セドリックが自分に逢に來た時のとをおもふて、新しひ小馬を貰たのを嬉がり、ツイ其前日これ見てといはぬ斗の顔付をして、さも悦ばしそうに、戸口まで乘て來た時、鞍着も大層チヤンとして立派で有たとなど、考へ〳〵、歩いて來升たが、人々が自分に眼をつけて居て、自分が通ると見て、何やら、人氣がさわだつて來る樣なのに、フト氣がつき升た。最初、其事に氣がついたのは、華美な上着を着た老母が、頻に自分に辭儀をした時で、それから又、モウ一人も顔を下て、「奥樣の爲に幾久く御幸福を祈り升」と祝てくれ升た。それからといふものは、自分が通のを見て誰も彼も皆帽子を脱で禮をし升た。暫時、何故かと、譯が分りませんかつたが、フォントルロイの母だといふ處で、敬禮を表して呉るのと心づいては、少し恥しく、

顔の赤らむのを覺へッヽ、ニッコリ笑つて、自分も儀辭をし、祝つて呉れた老母に「有りがたう」と優しひ聲で答へ升た。是まで雜踏を極めた米國の都會に人知れず住んで居つたものが、この通り質朴に眞心から禮儀を表されたは、大層物珍らしく、始めは少し間がわるい樣でしたが、到底、人情の温かな處に感心して、自から其風俗をも好む樣になり升た。夫人が石造の入口を通つて、會堂へ這入るや否、人々が待ち設けたに違わず、勇ましい馬や、揃の服の附添ひを從へた、お城の馬車が轟々の音を先にたてつゝ、角を出り、繚りの生垣の間を通つて來ました、立並らんでゐる人々は口々に、

ソラー、來たぞ！

といふ中に、はや、馬車は止つて、ダマスは先づ馬車を下り、戸を開けると、黒天鵞絨の服を着た少さな男の兒が、フッサリして、キラ〳〵して居る髪を後ろへ波打せて、先に飛び下り升た。スハと男も女も、小供も一同に瞳を据へて見て居升と、フォントルロイの父を見知つて居た者は申し合せた樣に、

イヤ、カプテンを其まゝだ　、カプテンに丸で、生寫しだ！。

といつて居升た。フォントルロイは、ダマスが殿を助けて馬車からお下ろし申す側らに、親しい大事な人の爲に、さも氣遣わしいといふ樣子をしてワザ、〳〵日向に立つて居升た。そうして、自分が役に立つ時分と思ふと、直ぐ、手を出し、肩を進めた處は、六尺の男子に凝して居り升た。ソコデ見て居る人々は、他の者は兎も角、孫どの丈にはドリンコート侯爵も恐ろしがられて入つしやらないとを始めて悟り升た。其孫どのは、こふいつて居升た、

お祖父さん、僕にヅット、寄りかゝつて入つしやいよ、みんながお祖父さんを見て、どうも嬉しがつてるとネ、そうして、誰でもお祖父さんを知つてる樣だことネ！、

侯爵は、

フォントルロイ、貴樣帽子を脱がないか、貴樣に辭儀をして居るではないか！、

ナニ、僕にですか　、

と、フォントルロイは急いで、帽子を脱ぎ、パッチリした眼で不審そうに群集した人々の方を眺めて、一ときに、みんなに禮をしようとして、おせつて居升た。前に夫人に物をいつた、よく頭を下げる、華美な上着を着た老

母は又、

若様に神様の御祝福を祈り上升、幾久しく、お榮へ遊ばせ

といひ升と、フォントルロイは、

おばあさん、有難とうよ！

と答へて、それから直ぐ禮拜堂へ這入つてからも、兩側に人の居並らんだ間を通つて、褥や、掛け幕の立派に備へてある定席に着くまで、人の眼印るしになつて居升た、

雜録

箱根の山づと

花園

十七日の午後箱根をさして出立ち、小田原にとまる、月おぼろにておもしろき夜のさまに、さてもえあらで、磯邊に立出でつるに、めづらしき大漁なりとて、人の氣いらだち、ものさわがしく、うしほかきたれし衣に脛わらはなる女、腰のあたりにのみ、みるの如きものまとひし男、などの走りちがふ中に、女の辭にて、乞丐とは、いかで、しか、いふにや、と、のゝしるに、男の、乞丐なればこそしかいへれ、とてうちたゝく音す、おのれおそる〳〵近よりてみれば、連なる人の側によりて、やよたれも聞ね、この人樣こそ、わが方人なれ、わが證人なれ、見そなはしけん、かの男が良吉を突倒してかたいとよびぬとて、うつたふる聲、やゝうれはしげに、かの親父は去年の八月にみまかりぬ、としばし空うちあふぎしが又かなたへ、はしりさりぬ、みれば五十近きに、若き男にまけじと、すまへるさまの、何となく、にくさげなりしが、この言葉聞て思へば、わが夫に殘されて、わが子、人の後に、おかじといかに心を盡すらん、父なき子と人にあなどらるゝを、母がひに、楯となりて、たすくる雄々しさ、ものしれる都人の及ばぬ所ありと佇ずむ折しも、例の師とも兄ともつかふる人、げに人は何にても、うつたふるものなくては、ありえぬものなり、とのたまふ時雲間はなるゝ月のさやけさに、

　かきくもる心の中は大空の
　　さやけき月のかげやしるらん

かく、われも月にかこちて、わがうきをなぐさむるも、はかなき心やりなり、この時はいまだ、人々にも馴れざりしが、箱根に行て二三日經るうちに一家の如くむつび合やうに成ぬ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日々に霧のみ深かゝりしが、めづらしく晴れて、あなたの山に、富士の高根など、さやかなるある日、姥子へ行ばやと艇うけて、湖をわたる、やがても口にうたひ出る、かの名高き蘇氏の唐うた、讃美歌などに心うかれ、かひとる人もやすみ勝にドブ／＼と水の音のみして、舟のとくゆかぬもをかし、海尻の新湯へさしかゝらんとする、少しこなたに逆富士うつれり、この富士の上を舟にて行に、船頭少くなけれど、舟は山にのりかけぬ、などゝうち興ずる、おもしろしともおもしろかりし、この日母より文のはしに

夏しらぬふしの高根をまへにみて
うちかたらふやたのしかるらん

とありければ

おもしろきまとゐにつけておもふかな
わかたらちねのこゝにあらはと

五とせ許、都には聞かざりし時鳥遠近の山にしばなくはいにしへのかしこき人眞似て、都をいとひしならんなどいふに

時鳥いとひて山を出でてふ
都のいかでこひしかるらん

この日の夜、つかれたれど、ねもやらで、月の出るを待て、三時頃、おのれ人々をそゝのかして、月見んとて立出、權現の祉にのぼる、いや高くしげり合老木の杉の下道、ほのかにもりくる月の光を力に、行まゝに、虫の音の聞えぬは幽靜の趣をかきたりといふ人ありしに心つけり、箱根は螢こそ、大豆ほどなるがあまた見ゆれ、虫の音はこほろきだにもなきしを聞かず、

中々に淋しともなし虫の音も
聞えぬ山のなつの夜の月

のぼりつきて權現の祉の階段を我もの顔に腰うちかけて、空あふげば、杉の木の間にみし月の梢にかゝれるに、光あまねく成有て、あなたの山の霧に、かつかくれかつあらはるゝさま、はるかに湖の水の少し見ゆるに、光りの流るゝさま、ものすごく、吹くる風身にしみてしらず／＼人によりそはるゝもわれながらをかしかりき

立ならぶ大木の杉の梢より
さしのぞくこそすめる月かな

見るものごとに、恐ろしく成て、あたりのありさまもよくはみ

で歸りつれど、おとにておもへば、この夜ともに行れし人々は皆劍術の達人なりし者を、何におそれけむ、今しばし心のどかにあるべかりしを、とわがおろかなるをくひぬ、是他さま〴〵の事ありつれど、みなゆめの如く忘しやうなり箱根の氣色は

　潮も山もひとつにおぼろ〳〵
　　霧のかゝらぬ日はなかりけり

人もしいかにありしかと、とはゞ、おのれも見し事聞し事皆おぼろげにておぼえずとこたへおかまし。

氷みづ

吉田のぶ子

小女「ヲ、熱い〳〵、汗でぐつすり、チヤ氷みづ、ほんとにこんなときにはこれに限る、私は一躰氷みづが大好ですから、これを飲と眠むいときでも目が覺るし、倦怠れたときも氣が淸々して復勉强する氣になるし、熱さ凌ぎにはこれに越すものは有ません、そうして第一氷水は飲み過る氣遣ひがありません、なぜなれば、氷水は唯の水の樣に、大きな玻盃に一ぱい盛て、呼吸もつかずに一口にグット飮むなんて！ことは出來ず、其上水が氷になるときは、其容積が增して一合のものなれば一合〇七一四二計になりますから、それでなくとも容積が增大て居る處を、鉋で削て、がさ〳〵にしてありますから、玻盃に山盛りにした氷みづでも、融て御覽なさい、よう〳〵玻盃に半分あるかなしです、それですから、お腹にはいつて、融てしまえば、氷水二はいも、唯の水一ぱいも同じことです、それに竹なんぞは柄杓で………

母「ソレデハ、お前は水が氷になると、容積の增す證據を、知てお出か、

小女「ホヲアノ、氷が水の上に浮くでせう、あれでも知ます、あれは、水が氷になると、容積が增すから、水より輕くなるのです、それから、冬になると、大きな丈夫な岩石でも、其罅隙に滲込だ雨水が、結氷膨脹るとき、其威勢で壓されて、劈けると云ふ、ことが書物にありました、それから信州の小諸邊は非常に寒い所だそうですが、其處では冬になると水瓶に菰を着るそうです、若そうしませんと、厚い氷が張て、水瓶が破壞るそうです、………「よくそんなこと知て居るて」ソレデモ、此間お隣のお伯母さんが話ましたもの………其外まだ氷水のよい處は、水の中に何か溶解ゐても、結晶る時

は純水ばかり氷て、その中に溶解てゐた雜物は、後に殘ります、だから氷は眞に眞水ばかりで出來たものに違ひ有ません、寒冷は腐敗を防ぐつて、先生が仰しやつたから、氷みづの中には、チブスやコレラ病の原因になるやうな、腐敗つた有機物はなかろうし、いくら飮んでも、大丈夫でせう、…………竹や〱。もう一ぱいおくれよう早くさあ。

母「ヲホヽヽヽ此孃は、まあ、いつの間にそんな理屈を云ふことを覺えたのでせう、大層氷みづびゐきだこと、だがねへ、氷水だつてそんなに、一から十まで申分のないものではありませんよ、其れはお前の云ふ通りよい處もありますが、惡い所もあるのさ、齒の外面を包でゐて、齒質を保護に、なくてならない琺瑯質は、寒熱の差甚しき飮食物を用ふる時は、損傷すると云ふではありませんか、氷みづを飮むとき齒にしみるのは、極齒の爲めに惡うござんす、そうして胃の爲めにも、氷のやうな冷物は消化作用を妨げてよくありません、又氷つた水はいつも純水で、少しも惡るい氣遣ひなしとも限りませんのさ、随分氷の中にも、小動物の死骸や、苔類なぞの有害な有機物が、附着てゐることもあるし、氷でさいあれば、何んでもいゝとは云はれませんよ、それだから、食用氷は衞生局の試驗を受けおくつては、賣ることが出來ないではありませんか。

小女「ヲヤ、そうですか、それでは齒や胃の爲めにわるいのあら、もう此氷みづも飮みますまいか。

母「マアそう云はずと、折角持つて來たのだから、それだけはお上りな、よく融して飮みさへすれば、そう害にもなりませんのさ、必竟氷は融るときには、澤山の熱を吸收しますから、今お話したやうなこともありますが、融けてしまえば其氣遣ひもなし、融けたては、冷いことも氷と同じで、口當りもよく、澤山飮みさへしなければ、身躰に障る差支へはありません、だからくどいやうだが、氷水を飮むなら、よく攪亂て融かしてお上りなさいよ。

青桐の葉を焼き粉にして油にて溶きヤケドに塗れば
不思議至極の妙効あり。

隨感

人世の別離

天知子

「壯士涙無きに非ず辭別の際に注がず」余は初め此句を男兒の壯語と思ひ、中頃は自然ならぬ逆情の僞句と信じ、而して今ぞ其實情に同感す。實に一種胸塞情感を抑えんとしつる熱涙の反語なる事を知りたり。此頃余は愛慕の睦びに兄とも妹とも想ふ人々の幻影が無情なる一聲の滊笛に抹殺せられ、幽かに消えゆく鐵路の轟きが最後告別の言葉を殘し、遥かに棚引き消ゆる黒煙りが終りに目合したる朦朧の面影を描きし時、實に得も言へぬ淋しさを胸塞きまで涙もて感じつるなり。余は此淋しき辭別を擔ふて悄然と旅立し、此夜暑き旅亭に冷やかなる床を擁し懊惱として悲嘆の夢も結びあへぬ折、一擊の强感は端なくも人世に『別離』てふ新文字を見出したるかの如く感ぜしめぬ。凡そ人世に別離程悲しきものは非ざるべし。會者定離の理は誰か知らずと言はん、然れど、冷淡にも定離なるが故に悟り明らめよと戒むるに至ては、余は其冷膓無情を悲まざるを得ず。果して情ある人間が悟り得べきの戒めなるか、其哀みは正直なる人情に善發せるの哀みに相違なし。別離の哀みは愛戀發達に從ふて深まり往く事を知らば、又愛戀の發達は人間を圓滿ならしむる唯一の者なる事を知らば、何故に斯くまで胸塞別離の感を人世に置き給ふか。何が故に人を此世に產出すに初めよりアダムイブの如く大人として出し給はざるか。ワザ〳〵嬰兒として出すが故に、父母に別れざるを得ざるの哀みを脱るゝ能はず、一歩〳〵と進みては漸く同胞の愛、友といふ者の味ひを切に知り初め、夫妻といふ不思議の情を覺へ、子といふ言ひがたき愛を感じ染むるに至て、漸々別離てふ大悲觀の淚渦中に巻込まるゝ無殘なる身の上とは成る。皇天何ぞ無情なるぞ。古人久しく此境に疑惑して蹉跎する所ろ、天道是か非かと怨慨し諸行無常と愁嘆せり。ア、余は今ぞ確かに知り得しなり、攝理は昭々として總て眞ならざるものなきことを。

人類の最も知り難きものは天父の愛心なるべし。空虛なる人間は種々の方向より常に之を教え居らるれども、其一部分すら感悟するに難し。若父母なく、友なく、妻子なく、同胞なくんば、いかでか人其一部分だに窺ふ事を得べき。子を以て始め

て親の恩愛を知る如く、親の恩愛を知て始めて天父の恩愛を僅かに知り得るなり。去れど、人間の言ひ甲斐なき痴さは、久しきに狃て刺撃なき時は眠り、恩愛も慣れては終に恩愛を思はず。斯して人世に別離といふ事無んば、人は到底切々の愛を感ずる事能はずして、其人物をも能く知る事を得じ「あふ事のもばら絶ぬる時にこそ人の戀しきとも知りけり」。蕙蘭將に茂らんとせばの熱句、實に此域に立ちて眞率に發するの語なるを感ず。悲みは人の眞心を突くの鋭鋒なり。鋭鋒なるが故に苦痛もて猛省せざるを得ず、此に於てか始て悲む者は幸ひなりといふ。もし別離なくんば新なる渴愛起らず、其愛の度すら知らざるに至らん。人は死して賞せらるゝの人物と成る者多く、人は別れて慕はしき眞友と成る者多し。別離は又之れ人間進步の大道か。死別は實に無常必滅の一悲劇を以て、天道の觀念を敎へ給ふの一敎理か。觀じ來れば悠々として哀みの中に微笑あり、淋しき中に溫みあり。意中の人々よ、御身等が潜伏せる人物を今新たに見ぬ、御身等が現はさゝる日常の至愛を今昭かに感ず。昏倒恍惚、暝目すれば、身はキリストの甚大の愛手に遊ぶ。親在す、友在す、主義の同胞皆在す。莞爾として目を開けば、煤びたる宿亭の扁額に、

我を思ふ人を思はぬ報ひにや我が思ふ人の我れ思はぬは

ア、何等の啣言ぞ、見るも憂し、讀むも苦惱。

心淋しき宿りに波の音を聽て漫ろ友の慕はしさに誌し送る。

普門品經（佛書）を讀む

天知子

翠深く水涼しき葦の湖畔に默坐し道念頻りに動く、行李を探りて觀音經普門品一卷を得たり、一讀迷痴の如く再讀して始めて眞骨を見る、嘗て聽く普門品を熟讀せば苦惱即時に解脫すと。今是れを誦讀して其迷語ならぬを知れり。

此經卷の大意は人世の困難苦腦災厄等は觀世音を一心稱名して觀音力を念せば悉く免かれざるものなしといふにあり、而して觀世音が現世に傳道するには種々に化身して其適所に應ぜざる事なく其得所に分れて働かざる事なく、能く怖畏急難の中に於て無畏なる事を施すと言ふにあり。試に佛語を咀嚼して言へば、人世の音響即ち肉界の種々なる現象を觀念して靈界に信念を逍遙遊せしむる事を觀世音の一名詞に假設し、常に此所に專念すれば自ら「我れ」無しと言ふに至るべし、故に爭鬪白刃には無敵と成り、困難には苦痛なく、苦腦は忘れ

災厄に懼れず、思想中唯一觀音の信念あるのみといふ、此點實に武道の無我無敵の觀念に同じく聖書の己れを去れといふ教理と同じ、而して此道の觀念を教ゆるには種々の方向より心の上に傳道して不動の膽力と剛毅の信仰とを吹込にあり、常に毎に願ひと膽仰とをせよ（毎に祈り毎に感謝せよといふに同じ）と教誡す。卷中の文字は稍々寓言の如く比喩の如く種々菩薩の名を出すに至ては殆ど莊子書中の人名に似て爾も意味深長の好文字多し、其卷尾に至り、回二斯妙因一、施二及一切一、信毀二見聞一、共會二實際一、の句ありて殊に短句教理の活々たるを見る、幽邃寂然たる茂林の下、小卷讀み終りて一友を得たる心地す。

小說

流れの葦

（四節）　響　（上）

是空子

夕暮の土のほとりを水の珠に貫ぬき、未だ露なきに小草に一日の慰さめを與へ、詣づるものはあらずと雖ど、墓石一々快ちよげに潤ほひたるは、知恩寺の夏の夕べ、知空が甲斐々々しく水を撒きたる后の淸景なり。

緣側はし近ふ、煙草盆を左手に、庭面を眺め、無言無心に寂寞たりける師の坊空也も、止むとを得ず、枯れて細やかなる聲を高くし、今しも足を洗ひたる知空が、少し離れて最と掛念顔に打聽くは、斯くて冷しくなりたるを倘暑しとか、片肌ぬぎて、何やらん聲高にのゝしる男のあるがゆゑ也。

道樂に車を挽くんジヤネーヤ、コンナニ傷をつけられて、アイタヽ、商賣が出來ません、コレでも家内がありますゝカヽアや、餓鬼が餓死やうなと、夫を善い樣だつて見てお出でなすつチヤ、旦那、少とし御說法と違へやしませんか。

わざとあるべし、特更ら平氣に落着居たる老僧は、此時、吶る細き聲を、咳の后ろより發し、

ナニモ、此方で傷をつけたのではなからうが、お前が自分て顚んだのだらう、お前のやうな大の男が、此の子供に投げられると云ふとはあからふじやあいか、餘り自慢して言ふほどの事でもあるまい、エ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此の小……、エッ此の小僧さん、人を馬鹿ッ、小僧さんに投られる野郎があるものか、何にチ誰にだつて投られるとはアリヤしませんや、余り暑くつて少こし燒酎を引かけた所で、此小僧さんに車をすゝめてたんだ、すると此方に居なさる、何ていんだか知らチーが、アノ髯の生へた旦那サ、いきなり、突たんだ、へー、此小僧さんが能く知つてラア、ナア小僧さん、ソウだらふッ。

イ、エ、と思はず可愛き聲を出して膝を進ます知空を、ぢつと見て、また落付き。

餘まり、そうでもなからう、餘計の事を言ないで、早くお歸り。

エ、歸れ、クソッ、しら〴〵しう、とぼけやがつて、お寺だと思つて、こちや勘辨してるんだ、餘り馬鹿にするねへ、サア、どうして呉るんだ。

老僧はぢつと睨む、

エッ、旦那、どふかして下せいナ、困りますぜ。

困る、困るだらう、餘り酒を飲んやうにさつしやい、今日は、膏藥代を少し上やう、早く直つて家業に勢を出すがエイ。

へゝッ、何に、お氣の毒さまですが、私どもの身分では、お願ひ申すより、へー。

煙草盆より取出でたる十錢銀貨を與ふれば、

コリヤ、十錢、ヘン、人をクソッ、旦那余り馬鹿になせへますな、……コレは、お返し申します。

返すか、……、夫ではやるまい。

旦那、十錢や二十錢貰ひたいつて、わざ〳〵此處まで來るものか、あしたからうちぢゅう餓死んです、家業も何も出來やしません、此の傷の直る迄は、お寺さんの事だ、どふか、お養なひなすつて下せへ。

膏藥代は上やう、人を助くる出家の事だから。お前方に扶持し上る余裕が寺にあらふ筈はない、よんで困ると云ふなら、壇下に談じて見やう、貧民救助の方もあるから。

貧民、旦那、貧民じやごぜへアセン、憚り乍ら毎日稼いでどうあり斯ふなり食てるものです、傷をつけられたから稼ぎが出來ねへと言ふのだ、ヨウ御坐へす、呉なきや呉ないで貰しねへや、其かわり、此の小僧をッ、

飛上りて、知空を捉へんとす。此時遲く、彼時僅かに早く、忽然驅け出でたる一個の紳士、熊が片腕を抑へて、緣側より下へ突き落せり。

ヤ、手前は、昨日の、

又、飛上らんとする彼が肩に輕く手を掛け、宙に投げて、顚倒せしむ。わざと起上りもせず、熊は倒れたるまゝ、聲を上げて、うなる。

ヲイ、車や、夫丈け元氣がありや、車は引けるぞ、早く歸つて勉强せヱ。

うなる聲を止めて聞居たるが、俄かに立上り、顏をしかめ、腰をなで、土を拂ひつゝ、平伏ばり、

幾らでも宜しふ御座りやす、どふか。

腹中の蛇（四）

湘川流夫譯

ヘルキメルと其伴は、邸内に入り來りしに、其内の一人を見るより早く、老僕シピオは、其皺顏に笑を含み、喜びて迎へ入れり。彫刻師は園內の小亭を指し、

暫く彼處に休息し、出づべき折を待つべしト

囁きかすれば、其腕に縋れる人は

神は必らず其折を敎へ賜ふべし、又吾身をも助け賜はんト

切ある聲にて答へけり、

ロデリックは今泉の傍に橫たはり居れり。其泉は、昔し若木の蔭を移せし時に變らず、同じ淸らかなる色を現はし、同じ靜かなる音をたて、沸き流れて日光に輝き映り、水は斷間なく入り替り、常に新たに沸き出づれど、其年代を尋ぬれば、老いたる森の齡に勝り、地中の岩と共に古し。實に千古變化なき泉の生命は不思議なるものかな。エリストンは彫刻師の入れるに心付き、

君は來れるよな、余は君を待ち居りたりト

身を起して言ひ出だせり、其時彼れの風躰は前日に異なり、溫順にして能く意を用ひ、主客を別にし自ら制する有樣は、却て人の判斷を誤らしめんとせり。今迄讀み居りたると見え草の上に半開きて現はれ見えたるは、鮮かに蛇の形の寫せる博物の書なりき。其傍にありし大卷の書籍は、ジエレミイ、テイロルの物せる解疑篇にて、樣々ある良心の病狀を說き、其苦痛に惱者は如何なる種類なり共、其記述に漏るゝとなしと云り、

是れ見賜へト

エリストンは蛇の書を指して、笑ひの唇を飜へし、
余は余が蛇の性質を知らんと探し求めたれど、此巻中に滿足を與ふる者なし。想ふに余が蛇は自然發生に出でたる世間無類の者なるべしト、
説き語れば彫刻師は其尾に付き、
此奇怪なる不幸は何處より來れるト、
問ひけるに、
老僕シピオの語るを聽けば、祖先の時代より、彼の罪なく見ゆる、清き泉に潛み居りたる蛇ありて、一度曾て曾祖父の腹中に入り、堪へ難き苦痛を與へて、數年間其處に宿り居りたる事ありしと言へり。是は實に余が血統の特性なるべし、されど余は未だ信ずると能はず、余が蛇は即ち余が物にて、他人の蛇に非ればなりト、
ロデリックは答へけり。
左は左りながら其原因は如何ト、
ヘルキメルは再び問へるに、ロデリックは高笑して、
オー人の心中には、蛇を生み出だすべき、十分なる毒氣あり。君は余が、市中の人に告げ聽かせたる事々を聞き知れるならん。余は幸にして蛇の只一匹なるを喜ぶ、君はさりながら蛇を蓄はざれば、世と感情を共にすると能はず。アラ痛や、喰ひつくは、喰ひつくはト、
叫び出だし、忽ち抑制の力を失ひ、身を踠き苦痛を現はして、草の上に倒れたる有様は、ヘルキメルの目には、如何にも蛇の擧動の如くに見え、同時に又言語の順序は妨げざれど、其間々に例の恐るべき吹嘘の音聞こえ來れり。
是は實事にあれ、想像にあれ、誠に恐ろしき災厄なり、其を療やすべき法ありや、あらば聽かせよエリストンと、
彫刻師は呼ばれば、
あきにはあらねど行ひ難し、唯一時、我身を忘るゝことを得あば、蛇は必らず出で去るべし、自ら惱める我心は、此毒物を生み出だせりト
ロデリックは呟けり。其時優しき聲して、
去らば吾夫、思ふ事を吾身に移し、御身の事を忘れ賜へト
ロジナは傍の小亭より出で來り、ロデリックの身に凭りかゝり、彼の煩悶は反射して、其顏色に現はれ見えしが、眞心より出る愛情に打消され、其苦みは只影か夢かとのみ思はれたり。ロジ

ナの手の、接するや否や、彼の身は一震ひ震ひ其と同時に傍の彫刻師は、草の波打てるを見、又何物か泉の中に飛び込める音を聽けり。其事の實なると否とは姑く置き、心中の戰場にて身を擒にしたる、惡魔の離れ去りて、正氣に立ち歸りたるが如く、ロデリック、エリストンは容を整へて坐を改め、是迄と事替り、落着きたる樣子して、意を込めたる聲を出だし、

ロジナよ、許せ、許し賜へト

せき出だせば、ロジナの感涙流れ落ちて夫の顏を沾せり。罰は極めて嚴しかりき。正義も今は許しつらん、況して婦人の愛情をや。ロデリック、エリストン！蛇は實の物にあれ、或は心の迷にあれ、何れ敎となるべきとあり。「嫉妬の形にて現はれたる君が恐ろしき自己心は、眞の魔物に比すべき毒あり。汚れ來りし君が腹は、再び淸くなり得べきかト

ヘルキメルの說けるをきゝて

其は又疑ふ迄もなし、蛇は元より想像あれば、思は雲と消え去ば、過去の暗きは如何にあれ未來に影を止めまじ、若其事々の、後の世遠く傳るとも、人の心を戒むべき話の種となるのみト

ロジナは優しき天女の顏に、笑を含みてぞ答へける。（完）

寄書

故武光道子履歴

一知人

道子は武光重輝の二女にして明治三年六月十一日を以て東京麻布區材木町九番地に生る四歳にして父を失ひ一弟正成其後を繼ぐと雖も未だ幼きを以て母孝子の鞠育を以て成長す今を去る三年正成病沒せしを以て孃實に家名相續の位置に立てり仝十年三月東京麻布區公立南山小學校に入り普通教育を受く仝十一年三月羣馬縣北甘樂郡高瀨村に轉寓し公立高瀨小學校に入る十七年三月群馬縣立女學校に入り十九年三月高等普通下等學科卒業仝月東京麻布東洋英和女學校に入り二十二年六月普通全科卒業仝年十二月芝區愛宕下町慈惠病院看護婦教育所に入り專ら看護の方法を研究し其業益上達せしも賦性孱弱數々病を起し鄕里の母兄等も大に之を憂ひたるを以て二十三年五月已むを得ず全校を辭す初め孃の此校に入るや謂らく目下博愛主義を實行し普く婦女子の地位を高むるには實業に如く者なしと其先見感ずるに餘りあり爾來身躰疲勞を加へ病蓐に在ること殆んど月餘にして漸く快癒に趣きしも居常悒鬱を感ずること數々越て二十四年五月再び病魔の侵す所となり學家看護至らざる所無きも日に增し衰弱に赴き遂に七月三十日午前八時永去せり孃資性溫良人に接する懇切幼より學を好み長ずるに及び家政を助け毫も倦厭の色を顯はせしことなく且つ常に節度を守り細事を處する頗る注意を以てせり嘗て東洋英和女學校通學中旦暮炊爨の業を執りつゝ普通の課程を修めたるが如き以て其素情を窺ふに足る、女學雜誌を初號以來常に講讀せり。

孃が群馬縣立女學校に在るや數々基督教の說話を聞き深く感ずる所あり優渥なる天父の恩寵により十八年十一月三日前橋教會に於て海老名彈正氏より洗禮を受く爾來信仰益進み熱心銳意主の爲めに働くことを務めたり當時道を信ずる者實に校中唯一人而して全校擧て之に反すと雖も少しも屈する色なく反て熱涙を奮て彼等を誘導するや爲めに數名の信徒を生ずるに至れるが如きは實に感ず可き事なりと す其病蓐に在るや神を信ずるの念深く如何なる病苦の際も敢て動ける色なく枕上常に聖書を友として自ら慰む病勢愈々革まり遂に起つ能はざるを知るや家族一同を枕頭に招き斷へず神に事ゆ可きを勸め懇懃に永訣の意を表し靜に祈禱を捧げつゝ永の遠眠に就けり實に享年二十二歳なり。

男尊女卑習慣の近因（中）

更ニ試ニ中世以降偉人奇士ノ事蹟佳話ヲ見ヨ鎌足ハ經ヲ南淵先生ニ受ケ淸廉呂ノ梗直ナルハ儒敎ノ君臣ノ大義名分ナリ文宣王ノ諡ヲ稱シ釋奠ヲ行フアリ眞備ハ唐家ノ典禮ニ依テ儀制ヲ定ム道眞ガ淸行ノ諫メヲ用ヒザルガ如キ淸行ノ封事ノ如キ巨勢金岡ノ聖賢障子ノ如キ當時ノヿ一ニ儒敎拜崇ノ意ニ出デザルナシ保元平治ノ蒙昧ナル時ニ在テスラ尙重盛ハ「爲公事辭私事、大義滅親」トテ其父ヲ諫メ獰惡ノ淨海ヲシテ良心ヲ回顧セシメタルニアラズヤ一天万乘ノ聖天子ヲサヘ遠島ニ流竄スルヲ憚ラザル大惡ノ逆徒義時ノ如キスラ「若シ親征ニ遇ハヾ」トノ問ヒニハ「兜ヲ拔テ降參セヨ」トノ敎ヲ下シタルニアラズヤ後醍醐ノ朝朱子ノ學傳ハル「志士仁人無求生以害仁、有殺身以爲仁、見義不爲無勇也」ト云ヘル聖言ヲ唱ヘテ聖駕ヲ船坂ニ扼シタル志士アリ「臣ニシテ死セズンバ敵ノ亡ビザルヲ憂フル勿レ」ト闕ヲ辭シタル楠子アリ賴之ノ足利氏ニ於ケル常ニ之ニ則ル不識庵ガ義ノ爲ニ上杉氏ヲ冒ス信長ノ義昭ニ於ケル秀吉ノ明智ヲ討ズル皆其意ニ外ナラズ下テ德川氏ニ至テハ惺窩羅山闇齋以下碩學鴻儒雲ノ如シ古學宋學折衷ノ諸派前古無比ノ盛ヲ極ム此時ニ當テ誰レカ又儒敎ノ人心上ニ關係ナキヲ疑ハン板倉周防守ガ袴ヲ拗シタルガ如キ一斑ヲ見ルニ足レリ儒敎ハ我國ニ於テ古來此ノ如キ勢力ヲ有セシナリ一事必ズ儒ヲ顧ミ一言必ズ儒ニ歸ス儒ハ實ニ我國ノ聖書ナリ之ヲ疑フモノナク之ヲ駁スルモノナシ試ニ見ヨ耶蘇敎國民ニシテ二聖書ヲ信ゼザルモノアラズヤ然ルニ東洋ノ諸學派中ニハ論難極メテ甚ダシカリシニモ拘ラズ苟モ孔子孟子ノ敎ト云ヘバ悉ク口ヲ噤シテ止ムノミ是故ニ其論爭ノ要點ハ僅ニ餘波ノ解釋ノ邊ニ在テ存スルノミ決シテ彼耶蘇敎國民ノ或ル一部分ガ其ノ本ヲ信ゼザルガ如キニハアラザルナリ若シ世上ノ事實ニシテ之ニ從ハサルアレバ務メテ說ヲ左右ニシテ敎旨ニ附會セシメンヿヲ務ムルニアラズヤ嗚呼此ノ如ク我國ノ習慣ハ悉ク儒敎ノ餘響ナルヲ知ラズ余ハ更ニ進デ儒者ノ經典ニハ如何ナル說ヲ見ルカヲ索メント欲スルナリ

禮記內則中ニ於テ婦女ノ事ニ關スルヿヲ左ニ摘錄セン

婦事舅姑、如事父母、鷄初鳴咸盥、漱、櫛、縰、笄、總、衣、紳、（中畧）適父母舅姑之所、及所、下氣怡聲、問衣燠寒疾痛苛癢、而敬抑搔之、出入則或先或後、而敬扶持之、進盥少者奉槃、長者奉水、請沃盥、盥卒授巾、問所欲、而敬進之、柔色以溫之、

男不言內、女不言外、非祭非喪、不相授器、其相授、則女受以篚、其無篚、則皆坐、奠之而后取之、外內不共井、不共湢浴、不通寢席、不通乞假、男女不通衣裳、內言不出、外言不入、（中畧）女子出門、必擁蔽其面、夜行以燭、無燭則止、

子甚宜其妻、父母不說出、子不宜其妻、父母曰是善事我、子行夫婦之禮焉、沒身不衰、

祭祀賓客、每事請於姑、介婦請於冢婦、

凡婦不命適私室、不敢退、婦將有事、大小必請於舅姑、子婦無私貨、無私畜、無私器、不敢私假、不敢私與、婦或賜之飲食衣服布帛佩帨茝蘭、則受而獻諸舅姑、舅姑受之、則喜如新受賜、若反賜之、則辭、不得命、如更受賜、藏以待之、婦若有私親兄弟、將與之、則必復請其故、賜、而后與之、

禮始於謹夫婦、爲宮室、辨內外、男子居外、女子居內、深宮固門、閽寺守之、男不入、女不出、男女不同椸枷、不敢縣於夫之楎椸、不敢藏於夫之篋笥、不敢共湢浴、夫不在、斂枕篋、簟席、襡器、而藏之、少事長、賤事貴、咸如之、夫婦之禮、唯及七十、同藏無間、故妾雖老、年未滿五十、必與五日之御、女子、十年不出、姆敎婉娩聽從、執麻枲、治絲繭、織紝組紃、學女事、以供衣服、觀於祭祀、納酒漿籩豆、葅醢、禮相助奠、十有五年而笄、二十而嫁、有故二十三年而嫁、聘則爲妻、奔則爲妾、

以上ハ冗長紛雜ヲ顧ミズ儒者ノ尊崇スル處即東洋習慣ノ基因ヲ記シ余ガ想像ノ妄ナラザルヲ證セリ諸君試ニ讀一讀セヨ婦ハ舅姑ノ婢ナルニアラズヤ、男女ノ別ヲ酷ニシ愛情ヲ傷ケルニアラズヤ、誰レカ之ヲ以テ夫婦偕老ノ實アルト云フカ、妻ハ夫ノ良友タルヿヲ得ザルハ論ナク其之ヲ撰ブヤ夫ノ意ニ從テ御フルヿヲ許サズシテ父母ノ意ニ屈從シ沒身不衰ト云フ況ンヤ男女意氣相投合スルヿヲ得ンヤ尊屬ノ强壓ハ抑モ此外ニ甚ダシキモノアルカ、又婦ハ一言一句モ自由ノ行ヲナスヲ得ズ、一文ノ私財ナシ況ンヤ我之ヲ得ルモ亦舅姑ノ許可ヲ請フニ於テヲヤ、細ニ之ヲ吟セバ種々ノ細密ナル事柄ヲモ發見シ得ベシト云トモ之ヲ諸君ノ探求ニ委シ更ニ又他書ニ就テ一二ノ確言ヲ探リ來ラン

書曰、牝鷄之晨、維家之索、

詩曰、婦人有長舌、維厲之階、亂匪降自天、生自婦人、

子曰、唯女子與小人、爲難養、近之則不孫、遠之則怨、

又儒者ガ多ク賴テ以テ修身ノ摸範ト尊崇スル所ノ小學中ヨリ一節ヲ摘記シテ左ニ揭ゲン

顏子家訓曰、婦主中饋、唯事酒食衣服之禮耳、國不可使預政、家不可使幹蠱、如有聰明才智識達古今、正當輔佐君子勸其不足、必無牝鷄晨鳴以致禍也、

或問、孀婦於理似不可取、如何、伊川先生曰、然、凡取以配身也、若取失節者以配身、是已失節也、又問或有孤孀貧窮無託者、可再嫁否、曰只是後世怕寒餓死、故有是說、然餓死事極小、失節事極大、

其外是等ノ說ヲ擧スル遑ナキニ苦ムナリ總テ是等ノ說ハ取モ直サズ中等以上ノ人士ガ腦膜ヲ掩蔽シテ迷路ニ彷徨タラシメタルノ實ハ決シテ爭フベカラザルノ事ナリ夫レ詩三百ハ男女ノ愛情ヲ說クヿ極メテ切ナリ儒者口ヲ極メテ之ヲ講說セリ成ル程關雎ニ「君子好逑」或ハ「琴瑟友之」トカ其他「桃之夭々」「靜女其姝」「一日不見如三秋兮」「摽有梅兮」ト云ヒ「君子偕老」ト云フ余モ亦其切ナル誠ニ服スルナリ然レトモ實ニ「東方明矣、朝既昌矣、匪東方則明、月出之光、」ト云ヘル夫婦ノ愛情アリシモノハ未ダ嘗テ之ヲ見ルヿヲ得ズシテ唯牝鷄晨鳴ノ爲ニ東洋ノ婦人ヲシテ三千餘年來深窓ニ屛居呻吟セシメタルモノハ詩ノ情ヲ口頭ニ誦シ口頭ニ許シタルニモ拘ラズ他ノ邪說ノ爲ニ實際ニ之ヲ抑壓シタル儒者ノ罪ニアラサルナキヲ知ランヤ歎ズベキナリ。

時事

○兩校長

細川潤二郎氏、女子高等師範學校長に、村岡範爲馳氏、音樂學校長に任ぜらる、兩氏が學に篤く、業に實なるは、世人が普ねく知る所ろたり、兩校ともに幸ひなるべし、但だ願ふ所ろのものは、餘り保守的もしくは餘り學術的に流れさらんとのみ、是なり。

○國家教育

吾人は國家教育と云へる流行の文字に頗ぶる不審を置くものなり。若し愛國心を養成すと云はゞ、何等の教育か愛國心を度外に置くものあるべき、言ふ迄もなし。若し國家と云ふとのみを主旨とすと云はゞ、眞誠開發的の教育にはあらず。又若し日本の習慣に據るとを旨とすと云はゞ、例するに、音樂師範などの教育法に於ては、如何にすべきとなるか、吾人は此等の教育は專ぱら西洋風のみを利用しつゝ、而も國家教育の語を切りに叫ぶ所ろの人に會する毎には常に一笑す。

○國家

十九世紀下半の流行物「國家主義」は、日本に舶來して、一種の都合好き新意義に反譯せられたり。但し、此頃は、追々其眞主旨も瞭解せられ、多少實際に行はれんとするの傾むきあり、鐵道公有、自由教育などの議論幾分か勢力を得るに至りしは、其兆ならめ。一失、一得、之にも亦た相應の利益あらんとす、但だ請ふらくは、ヲウイダをして、國家は罪の教師なりと言はしむる迄の國家主義ならざるとを。豫じめ、先づ警戒せずんばある可らず。

○森林

日本面積の三分の二は皆な山なり、而して山の多くは皆遊び居れり、斯て、日本に財源乏しと云ひ、たゞ貧乏々々と歎く、吾人、高きに登りて山を見る毎に、未曾て慨泣せずんばあらず。本年の議會には、政府も、森林法案を呈出すと聞けり、議員諸公亦た百年の大計を沈思して可あり。

○殖民

殖民の事は固より大賛成の事あり、左れば、日本内地、尚ほ夥たゞしき、未用地、荒蕪地の存するとを承知せざる可らず。海外にのみ目を着けて、北海通に注意せざるもの多く、北

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

海道々々と言ひて、眼前手近の原野圓山に毫も氣の付かざるもの更に多し。

○外資輸入

保守黨の張本すら、內地開放を主張する世の中になりぬ、志士須らく度量を闊擴し、大ひに外資輸入の偉策に盡力すべし、今は區々として、攘夷の二の舞を爲すべき時にあらず、五大洲の大勢を知らずして意張るを以て、眞の慷慨とは言ふ能はず。

○俠禪子

昨年來官海に隱沈として万斤の重を掛たるは、大藏次官渡邊國武氏なりとす、雄膽愼密にして而して寡慾無邪なるを以て、碌々凡々たる一望平沙に、燦として眞珠光を發てる心地す。君が如此ありしは、其禪定を得たるに根づくと聞けるに、今や更に一進歩し、近來遂に基督の心を確守するに至れりと云ふ、今后一入の見榮あらんと、眼を刮して待つ。

○婦人大會

國中の諸々の婦人會大ひに連合大會しては何如にやとの說、婦人矯風會誌上に出づ、吾人亦固より之に同意すと云へど、來る年の夏は、先づ婦人夏季學校を開き見んヿを、切に勸告す、而して之が爲めに應分の力を盡さんとは、吾人社員が、尤とも喜こびとする所ろ也。

○電話交換の女　ベルリンの電話交換所には百二十人の婦人を使雇するヿとなるが、今后は一切男子を廢し女子をのみ用ゆるヿに定めたり。そは女の方、聲嚶嚶なるゆへとぞ。

○ベサント夫人　ベサント夫人は、ロンドン府學務委員の次期改撰には、當撰の競爭を爲すまじきヿに決心せりと言へり。何にとなれば、神秘教會のブラバツキー女史死せしのちは、其傳道の爲め夫人が力を用ゆべきの地大いなればなりと。

○母、母　此頃、ロンドンの著名なる勞力者組の統領ジョン、ボルンズが平生の事を記したる人ありて云ふ、彼には良母ありき、彼れ之を追懷し、女子の爲に働らく事の總てを皆な之が爲に神聖の事務なりと感ず、故に其社會運動に多少の餘暇あるときは、府內イースト、エンドの工女輩を助くるの事業を成さん爲め、中等婦人の諸團躰に力を假すヿを樂しみとす。而して其社會運動の補助者の中には、多くの女軍あり、故に彼嘗て云へらく、余は、ストライキを起す一百の男子を引率せず、義務を盡すヿに忠實なる十万の娘子を支配すと。

○全世界婦人禁酒會大會　を來る明治二十六年万國大博覽會のあるとき、シカゴにて同時に開かんとし、其準備に關する六ヶ條の問を會頭ウイラードより天下に質したり。

○レデー、マクドーナルド　カナダのヂスレリーと稱せられたるマクドーナルド氏の未亡人は此度貴族に列せられぬ。亦たヂスレリー氏の夫人の如く、良人を補助して其政治上の運動に力を加へたるヿ大力ならず。

○伊太利の婦人　近信に云く、矢張り女は聖殿に入るヿを能わず、日本の昔と同じく神聖を汚すものと認めらるゝ故なり。然るに、總ての大學は自由に門戶を開き、男子と同等の學位を與ふ。女權論は未だ起らず、但し女子教育を重んずるの輿論は日々高し。文部大臣バスクエール、ビラリ氏の夫人は學德ある英國の婦人なるが、良人と共に熱心に女子教育の擴張に力を盡す。

○禁酒醫院　シカゴに設けたる婦人禁酒會の禁酒病院（アルコール類を一切藥用せざるヿを旨とす）は大いに成功の結果あり、此度十万弗を以て更に一堂を增築するヿとなりぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女報

あい子編

●米國の養蠶業　米國カリフォルニヤ州の人民は、先頃も製茶業を試みんとて、支那駐在の公使に依頼し茶樹を取寄せたりしが、聞く所に據れば過日桑港より横濱に入港したる汽船チャイナ號に乘組みて渡來したる一女子は、カリフォルニヤ州にて養蠶業に從事し、今回日本の養蠶法并に製絲法を研究せんとて來りしものにして、其携帶する繭は、我最良の繭に比敵すべきものなれば、日本人の手にて之を絲に製せしめ、見本として紐育の市場へ送る筈なりと、又同州の氣候は桑樹の生長に適するを以て、養蠶業も次第に盛なるべしと云ふ。

●女子の郵便局員　英京倫敦の郵便局員に欠員あるに付、女子をして其補缺たらしめんとて、此程試験を行ひたるに及第したる者百十八人あり、此等の女子は一年三百弗の俸給を受くる筈なりと。

●東洋婦女子の生涯　出生の時は喜ばれず、幼年の時は教育せられず、寡婦となりたる時は生活の助を受けず、老年になりたる時は保護せられず、死去したる時は哀まれず、是れ東方亞細亞婦人一生の境遇なりと、米國新聞に掲げたり。

●世良田亮氏夫人のぶ子女史　は明治廿二年一月米國に渡航せられ、オハイヲ州ベンシルベニア「レーキエリー」、セミナリー」に於て螢雪の勞を積み、歴史、動物、躰操、「ピヤノ」の諸課を究め、本月二日を以て歸朝せられたり、女史は九重の大内山に奉仕られ、敷島の大和の花を朝な夕なに愛られし身なるが、今亦米國の山紫水明の地を歴遊せられたれば、其の風采和氣掬すべきが如し。(福音新報)

●滋賀縣高等女學校　は教員十五人にして内男一人女四人を除くの外は師範學校及大津高等小學校の教員無給にて之を補助す、生徒は百二人あり、其他大津高等小學校より委託を受け教授する生徒八十八人あり、之を合算すれば百九十人となり前年より二十六人を增す、本年四月從前の規則を改正し本科は修身國語數學地理歴史理科習字圖畫音樂體操家事の諸科とし英語は志望者に限り兼修せしめ、別科は小學校教員たらんと欲する者のために之を設け手藝專修科は其學科を修身手藝の二科とし隨意科は手藝の一科とし豫科及唱歌速成科は前年と異なることなし學業は漸次歩武を進め殊に實用に留意し教養せるを以て、其の成蹟の見るべきもの尠からず、本年第三回内國勸業博覽會に生徒の裁縫品を出品し褒狀を得たり校費は生徒の授業料有志者の寄付金及大津町入補助金を以て支辨し維持寔に鞏固なり。

●裁縫科生徒　仙臺市職業學校内彤管學校にては、六日卒業式を擧行したり、各級生徒二十五名にして全科卒業生は三名なりと。

●仙臺白石町婦人會　今泉加藤二女史の發起になりたる同會に於ては、來る陰暦十七、十八兩日を期し、仙臺佛教々會より會員を招待して演説會を開かんと準備中。

●皇太子御約婚　羅馬尼皇太子フェルヂナント親王は英國皇帝名譽女官ヴァレスコネと婚姻を契約せられたり。

●女權(雜誌)　神田泉町一番地の婦人德義會の首領藤井よし子孃にはいよ〳〵九月十五日より雜誌を發兌する由なるが其題號は女權といふよしなり。

●廢娼建議案　關西耶蘇教各派連合して之れを第二期帝國議會に提出せんと奔走す。

●勇子の百ヶ日と墓碑供養　來る廿九日は畠山勇子の百ヶ日相當に付き末慶寺にて西山派管長督願寺山本觀純師及住職和田準然外僧侶數名が法要を營み又來九月中旬には墓碑竣功に付同月廿日は命日なり且つ彼岸の入なれは石塔供養を行ひ奏樂、平曲、明淸樂、仕舞、狂言、茶席、生花、六齋念佛、豆搔餅茶の摂待抔を催ふす筈なりと。

●廢娼請願　長崎市内基督信者は、本年の議會に向ひ全國廢娼の請願を爲す事に决し、目下夫々調印中。

●山梨廢娼義會の幹事會　全會は、昨日太田町山梨英和女學校に於て開會し、今回東京廢娼會員渡瀨寅次郎氏來峽に付種々協議を爲したるよし。

●密賣淫撲滅の路傍演説　山梨縣西八代郡市川大門村に設立しある矯風會にては先々月頃より、全地方に密賣淫の横行するを憂ひ、會員中交る〳〵路傍演説を爲して、專ら密賣淫撲滅に力を盡したるが、其の甲斐ありて近來は大に賣淫者の減少を見るに至り、現に最初は密賣の手引を爲すと覺ぼしき家十四五軒もありたれど、目下は僅々數軒に過ぎざる程となれたれば、ます〳〵奮つて密賣淫撲滅の策を講じ、全く根を絶ち葉を枯らす迄は止まざるの决心なりと云へり。

●東京婦人禁酒演説會　明十五日午後三時より京橋區西紺屋町二十番地銀坐會舘において、米國哲學士根本正君の演説あり。

●卒業生　神田一ッ橋通町なる共立女子職業學校にては、兼て學期試驗執行中の處、去十日を以て悉皆結局したる由にて、其卒業生は甲科各學科合せて五十三名、乙科は六十四名なりといふ。

●横濱山手六十七番英和女學校　は、還度其狹さを來せしため、去る頃より同三十四番へ板舍新築中なりしが、愈々來月中旬其落成を告ぐる由なれば、次學期よりは此處に引移り、規摸を一層盛にし幾許の女子を教育する由、就きて其校名を捜眞女學校と改め、規則を新成し、教員を改聘し、全く舊躰を洗脱するとのこと、又婦人傳道師を養成すべき神學科をも新設する趣なり。

●近州彦根女學校　にては、慶應義塾卒業生なる杉原俊三郎氏を校長に聘したる由、同校は井伊家より維持し來りしが、同校長は今より一郡より一郡一地方より一地方と盛にして縣立となるに至らしむべき目論なりと。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●岩手効稚園　盛岡にある同園は、是迄中止の姿なりしが、先程有志者の盡力により再興の運に至れり、愈々九月一日より開園する筈にて目下生徒募集中なるが應ぜしもの三十餘名ありと。

●「暗路の燈」　曾て「千代の礎」を出版し、全國の日曜學校に贈りし万國日曜學校協會々員米國ハッチ夫人は、又今度パンセー女史原著一本と資金とを送越され其譯辭出版及配付の事を喜の音發行人三浦氏に依頼せられありしが、此頃譯成り標題の如く名付け目下印刷中の由遠からず出版するに至るべし、出版次第日曜學校へ二册づゝ呈するとの事なり。

●取消　女學雜誌第二百七十七號の女報欄内「娼妓相共に金子せん子を呪ふ」と題せる一項の記事は、事實無根の由、申來りたるに付き取消す。

●正誤　「歸省中の女學生と婦人社會」と題する項中横濱海岸女學校生とあるは築地海岸女學校生の誤り。

●社員歸省　弊社員川合信水病氣療養のため郷里山梨縣に歸省、九月はじめに上京すべし。

●日本全國卒業女學生人名人數一覽

●東京の部

●女子神學校卒業生　佐藤はつ子　太田たつ子　泉水いよ子　栗原ゆき子、澤邊ふさ子　沼邊さき子　酒井すみ子　今田くに子　吉田たつ子　高橋いね子　澁谷はる子　永井こま子　佐藤たつ子　大越さよ子　横尾むめじ　影山はる子　梅村しゆん子　飯田たか子　飯村いわ子　鈴城すゞ子　加藤かく子　坂本つや子　伊知地みね子　佐藤ふく子　小林いつ子　川上きく子　川口かふ子　中谷かめ子　松本きん子　佐藤さく子　北條きぬ子（合三十一名）

●地方の部

●千葉縣女子師範學校卒業生　長谷川ゆう子　鎌形もと子　杉山しづ子　牧野ふき子　増田なか子　久野さの子　一瀬こう子　柴田かよ子　齋藤たね子　村松くめ子　平川きん子　久代きみ子　服部ゆき子　長尾さき子　市川みね子　淺羽かね子　飯田ぶん子　清宮きよ子　秋葉ため子　山田さし子　伊庭つね子　根本せん子　林澤よし子　大和千代子　長谷川やへ子　佐瀬やす子　石塚じゆう子　青山いく子　久保田かま子　佐久間たい子　品川さら子　田村ぎん子　喜多つや子　一瀬ふさ子　淺田さみ子　金澤たつ子　渡邊こう子　萩原みつ子　大野すみ子　岩淺かめ子　宇島ひさ子　鈴木すわ子　村杉さく子　相馬さら子　近藤千代子　小澤きく子　太田くに子　雷たつ子　山内みつ子　小出てる子　角田さみ子　齋藤しづ子　内浦ぬい子　木村つな子　篠崎ふさ子　紅谷なほ子　鵜澤やす子　谷田具やう子　鈴木てる子　檜垣けい子　伊東のえ子　木内いく子　小河原さく子　前澤よね子　水飼きよ子　原きん子　和田たけ子　榊原よね子　大須賀つる子　長谷川もよ子（以上七十名舊千葉師範學校中等科卒業生）　川村やす子　紅谷みの子　鈴木りく子　石橋のぶ子（以上四名同初等科卒業生）

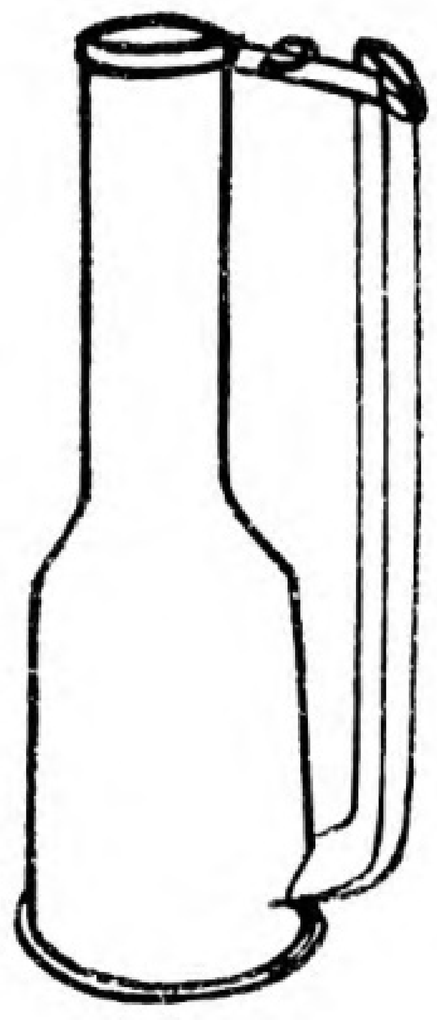
品名	八月廿八日
白米（一円ニ付）一等米	一斗〇升四合
二等米	一〇七
三等米	一一〇
四等米	一一五
五等米	一二一
正米（一円ニ付）越中米	一斗五升七合
越後米	一四五
尾張米	一四八
美濃米	一三九
一志米	一四〇
雜穀（一円ニ付）本貫大麥	三斗六升五合
上州小麥	二〇五
竹林麥	二二五
梅澤大豆	二三〇
青柳大豆	二〇五
吟小豆	一六五
黒胡麻	一二七
白胡麻	一四八
鹽（一円ニ付）赤穂	俵 二七〇
大塲	二七五
本齋	四二五
新齋	四六五
醬油（一円ニ付）最上　極上　上物　中物　並物	樽分厘 七八　八五　八八　一、一五　一、三〇　一、六五　一、八〇　二、〇〇　二、二〇　二、五〇
味噌（一円ニ付）地製上白	貫 七、〇〇〇
同上赤	七、〇〇〇
同紅赤	四、三〇〇

品名	八月廿八日
八王子織（一円ニ付）八端織	円 四、五〇　六、五〇
嘉平治平	四、五〇　五、二五
節仙臺	六、七五　七、二五
仙臺平	七、二五　八、二五
甲斐絹	三、〇〇　三、八〇
日本塲	四、二五　五、七五
節糸織	三、〇〇　三、七五
本糸織	三、五〇　五、二五
一樂織	六、五〇　一一、〇〇
飛地八丈	三、七五　七、〇〇
黒地八丈	二、三〇　四、五〇
玉八丈	二、三〇　二、七五
岸紵	二、四〇　二、七五
黒斜子	四、七五　七、〇〇
白斜子	五、五〇　一〇、〇〇
黒八丈	五、五〇　一一、〇〇
白木綿（一圓ニ付）玉鶴	反 三五〇
綾鶴	三八〇
日ノ出鶴	四一〇
苔柳	三一五
稲岡	三五〇
蓬萊	三、九五
改メ	三五〇
眞綿（一個ニ付）上々入金	円 一二〇、五〇
上入金	一一七、〇〇
並入金	一一一五〇
毛糸（百斤ニ付）鶴判	円 九八、〇〇
同染分	九九、五〇
同中細	一一八、〇〇
同極細	一二〇、〇〇
最上スコッチ	一三二、〇〇
靴下用上物	一一六、〇〇

品名	八月廿八日
製茶（一貫目ニ付）山城江州稀大頭	円 二、六〇
同稀頭	二、二五
同大頭	一、九〇
同中頭	一、五八
同中茶	一、二〇
狹山稀大頭	一、九五
同大頭	一、六五
同中頭	一、二五
同中茶	九〇
乾海苔（一百枚ニ付）洲崎	円 七〇　一、〇〇
大森	二五　一、〇〇
深川砂村	三五　一、〇〇
大師潮田	二二　八〇
上總	二五　七〇
仙臺	二〇　六五
炭（一円ニ付）伊豆上	俵 四五〇
同中	五六〇
同下	六五〇
角備上	二七〇
丸備上	二一五
土釜	八五〇
水油（一樽ニ付）地水	円 六、五〇
胡麻	九、八〇
荏油	九、八〇
桐油	六、六〇
綿油	七、三八
坂水	七、四二
石油（一箱ニ付）チヤスター	円 一、六二
デボース	一、六一
ホーキ	一、六四
ロシヤ	一、六〇

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

新發明品 **手桶湯わかしの廣告**（專賣特許願中）



一家の經濟は細かき所ろに用心して、些細の事を大切にするにあり、古しへより儉約せずして家の富みたる例し曾て有らず。扨て、此の儉約を爲さんには、家の内の用事を成べく簡畧にして、無用の手を省き、無用の費を惜しむにあり。儉約は、富を生ずるのみならず、勉強を生じ、人々心はげみて皆々面白くあり、一家相樂しみて春風の心地よきが如くなるものなり。一家の經濟に心を着くるは、家を富まし、家を樂しくし、家を樂園の如きホームと爲するものあり。此主意を以て、吾社はホームを美しくするとに樣々心を碎き多年、文筆敎育の上よりして之を試ろみたれど、亦以て一家内の實際の改良を促がすとの大切なるを感じ、先づ家具を一箇便にして、細君の勞を省き、台所元の入用を少くするの法方を工夫せんとす。

扨て第一に工夫したるは、手桶湯わかしなり。此は手桶の中に湯わかしを入れ、僅かの炭火にて二十分間に之を熱湯にわかす法とす。器具は至つて簡便なるものにて圖に示すが如し。手桶にても、水がめにても、盥にても、風呂にても皆な用ゆべけれど、夏向き行水などに使はんに、手桶に投げ込み置き、二十分にて沸きたるを一杯用ひ、更に第二の手桶に投げ入れて、又の二十分間に更に熱湯を得ば、至極重寶ならんと思ひ付き、假りに「手桶湯わかし」と名づく。目下專賣特許願中ゆへ、遠からず兇許あるべし、左れど時節がら一日も早く入用の品と思ひ、八月一日より賣出すべし。代價は銅製にて一個一圓五十錢とす。更らに追々工夫して廉價にて出來上るやうにすべし。

八月廿二日

東京麴町區下六番町六番地 **女學雜誌社家具部**

女生徒募集公告

速成科六ヶ月ノ卒業、本科ハ二ヶ年ノ卒業、學力ニ依リ相當ノ級ニ入ル、本科ハ今般廿五名ノ卒業生ヲ出ス、此際規則ヲ改正シ一層親切ニ敎授ス寄宿生拾名、通學生五拾名、入學ヲ許ス、規則入用ノ貴女ハ二錢ノ切手送ラバ速ニ呈ス

東京市本郷區東竹町二十五番地 **和洋裁縫傳習所**

大本上下二冊 紙數大約三千餘頁

訂正增補 **大日本人名辭書** 再版豫約廣告

附皇統系圖、伏見家系譜、京極家系譜、有栖川家系譜、閑院家系譜、藤原氏系圖、平氏系圖、源氏系圖、北條氏系圖、新田家系圖、足利氏系圖、織田氏系圖、豊臣氏系圖、德川氏系圖、巨勢家譜、宅磨家譜、土佐家譜、狩野家譜、諸曲五座家譜、淨瑠璃總系圖、長唄系圖、俳優系圖、茶流系圖、武術諸流系圖、刀劔師系圖、相撲、儒者學派、歌學派、古方家醫譜、方今家醫譜、鍼方家醫譜、西洋方家醫譜、大日本人傑年表

此書は上は帝王相將より下は士庶名媛工藝諸雜家に至る迄苟も有名なる者は皆之を網羅したる者にして其の傳記二萬有餘に及べり故に日本古來の人物を知らんと欲するもの此書により宜きはなし然るに其前版は既に賣盡したるを以て其需要に應することを得す爲に世間往々價金三十圓内外を以て賣買するに至れりと聞く豈文苑の欠典ならずや故に弊社は更に訂正を加へ二百餘名の傳記を增加し（行數を詰め紙數を節し因て其價を減し）再版するに決せり然るに再版亦巨費を要するを以て勢豫約に依賴せざるを得ず願くは江湖諸彦速に此募集に應ぜられ弊社をして此事業を爲すを傳せしめられんとを

一此書定價十二圓にして豫約價左の如し

本年八月中一時入金するもの　金六圓

本年十月までに入金するもの　金七圓

一本年十一月出來

近年建碑の事非常に流行すと雖も芳名を永遠に傳ふるに至ては之を此書中に加ふるに如かず有名なる人士の子弟たるもの請ふ父兄の紀傳を寄送するを惜むなかれ弊社は審議の上之を掲載することあるべし

明治廿四年八月

東京市京橋區彌左衞門町七番地 **經濟雜誌社**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

本校各學科生ニ欽員アリ且今般教師ヲ增シ校則科目等ヲ改正セリ入學志願ノ方ハ至急申込アレ入學試驗九月三日四日五日
但規則書入用ノ方ハ郵劵二錢御封送アラバ直チニ進呈スベシ

明治二十四年八月

横濱山手百七十八番
フヱリス和英女學校

福音新報

每金曜日發行

社論 信仰上神學上社會上に關する斬新有益なる論說を掲載す
說教 神學上に關する忠實なる桒なり
說況 全國各地各教會の教況蒐めて此の一欄にあり
教說 大家の說教を坐なから聞くの便利あるべし
其他雜錄、家庭、史傳、外信等凡て靈魂の滋味にあらざるはなし

定價表

	前金 市内無郵税	市外郵税共
一部	二錢五厘	三錢
十三部(三ケ月)	卅一錢五厘	三十八錢
廿六部(六ケ月)	六十錢	七十三錢
五十二部(一ケ年)	一圓十四錢	一圓四十錢

發行所 東京市麴町區三番町十番地 福音新報社

看護婦生徒募集廣告

此回本社看護婦生徒募集候條志願ノ者ハ本月三十一日迄ニ本社病院(南豊島郡下澁谷御料地内)エ申込可シ但シ年齡廿歲以上三十歲以下身幹四尺六寸以上ニシテ健康獨身ノ者ニ限ル猶規則並ニ出願手續ハ本社病院ニ就テ承合ス可シ

廿四年八月

日本赤十字社

私立明治女學校 生徒募集廣告

小學尋常科卒業の人は無試驗にて最下級即ち豫科第一年級に入ることを得。
豫科を三年とし高等小學科の教授を悉くす。吉田のぶ子其科長たり、巖本善治氏之を監理す。
豫科了りて後ち本科を三年とす、賢妻良母を養成することを主旨とし、家政女藝及び女學を悉とく教授す。
● 右九月十日後各級に入學を許す、規則書需用の人は郵劵封入申越あれ。

東京下六番町 明治女學校

廣告定價

一行 一回	前金拾錢 (廿七字詰)
同 三回以上	一割引
同 六回以上	二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

雜誌定價

一冊。	六錢	郵税。五厘
十一冊。	五拾八錢	郵税。五錢 (但府内無郵税)
半年分	壹圓四拾三錢	府外は 壹圓五拾六錢 (同前)
一年分	貳圓六拾錢	府外は 貳圓八拾六錢

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

本校各學科生ニ缺員アリ且今般教師ヲ増シ校則科目等ヲ改正セリ入學志願ノ方ハ至急申込アレ入學試驗九月三日四日五日
但規則書入用ノ方ハ郵券二錢御封送アラバ直チニ進呈スベシ
明治二十四年八月
横濱山手百七十八番
フエリス和英女學校

福音新報
每金曜日發行
社說
論說
敎說
說敎
況說
說
信仰上神學上社會上に關する斬新有益なる論說を揭載す
神學上に關する忠實なる案なり
全國各地各敎會の敎況蒐めて此の一欄にあり
大家の說敎を坐なから聞くの便利あるべし
其他雜錄、家庭、史傳、外信等凡て靈魂の滋味にあらざるはなし

定價表

前金	市內無郵稅	市外郵稅共
一部	二錢五厘	三錢
十三部（三ヶ月）	卅一錢五厘	三十八錢
廿六部（六ヶ月）	六十錢	七十三錢
五十二部（一ヶ年）	一圓十四錢	一圓四十錢

發行所 東京市麴町區三番町十番地 福音新報社

看護婦生徒募集廣告
此回本社看護婦生徒募集候條志願ノ者ハ本月三十一日迄ニ本社病院（南豐島郡下澁谷御料地內）エ申込可シ但シ年齡廿歲以上三十歲以下身幹四尺六寸以上ニシテ健康獨身ノ者ニ限ル猶規則並ニ出願手續ハ本社病院ニ就テ承合ス可シ
廿四年八月
日本赤十字社

私立明治女學校生徒募集廣告
小學尋常科卒業の人は無試驗にて最下級即ち豫科第一年級に入ることを得。
豫科を三年とし高等小學科の敎授を悉くす。吉田のぶ子其科長たり、巖本善治氏之を監理す。
豫科了りて後ち本科を三年とす、賢妻良母を養成することを主旨とし、家政女藝及び女學を悉とく敎授す。
●右九月十日後各級に入學を許す、規則書需用の人は郵券封入申越あれ。
東京下六番町
明治女學校

廣告定價

一行 一回 前金拾錢（廿七字詰）
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし
特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

雜誌定價

一册。	六錢	郵稅。	五厘
十一册。	五拾八錢	郵稅。	五錢（但府內無郵稅）
半年分	壹圓四拾三錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢（同前）

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

WASON
HR
1104
J97+

Aug. 1891
m. 280

女學雜誌

第二百八十號
明治二十四年八月廿九日發兌

新譯小說　淮北の枳　花圃

春と秋　何れか樂しき　六女學生の答

新經驗談　保姆の乳　石翁

下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY